

「大変さもあるけれど楽しさや喜びの方が大きい」と吉野さん
 ㊦と波多江さん㊧、仲野さん

農のある暮らし楽しむ

地元農家と連携し会員が米・野菜作り

「受け継がれてきた農地や風景を地元農家の協力を得ながら一緒に守っていきたい」と話す、NPO法人「畑と田んぼ環境再生会」の田島清春理事長(66)。神奈川県相模原市で、地元農家と連携しながら市内の休耕地や耕作放棄地を借り受け、地域住民を中心とした会員約50人が米や野菜を栽培する。1年かけて米作りを体験する

研修会を毎年開催し、会員を増やしてきた。研修は土日を中心に、育苗から収穫・脱穀まで全て手作業で管理する。研修終了後は「田んぼ環境自作人」として認定し、翌年からNPOが管理する田畑を割り振る。収穫物は販売せず、会員同士や地域農家と交流を図りながら、自給自足的な暮らしを楽しんでいる。

今年の研修生は7人 「栽培の大変さ実感」

NPOでは計1・4畝の水田と畑を管理する。今年の研修生は7人で、約11ヶ月で米作りに挑戦している。農業や化学肥料は一切使わない。取材当日は、田植えが終わった水田の草取りを行った。

育苗から手作業で

を見るのがうれしくて楽しい。食べ物栽培する大変さを実感している」と話す。
 同市の吉野紀代子さん(43)は「外で体を動かすことがとても気持ちがいい。研修に参加し始めて早起きができるようになりましたよ」と笑顔をみせる。
 研修は土日の午前9時から正午までが基本だ。種まきから収穫まで、草取りや生き物調査も含め全

活動の原則は 自然を守ること

24回で、収穫した米は分配する。12回以上参加すれば「田んぼ環境自作人」に認定され、会員として翌年から、自分で耕作できる田畑が割り振られる仕組みだ。

会員は、30〜80代の定年退職者や会社員、主婦などが集まる。それぞれ1〜5ヶほどを管理し、一人で耕作する人、夫婦や子供連れで耕作するなどさまざまだ。

活動は、①農業・化学肥料は使わない②草や虫を敵としない③手作業で汗を流す④自然の循環を妨げない——が原則だ。「農家の高齢化や離農が進む中、市民が農に参加できる場が必要」と、理事の仲野忠晴さん(56)。地元農家の協力を得ながら、市民の手で生き物あふれる自然環境を守っていくと

耕作放棄地を再生 環境保全にも一役

の思いを共有している。
 東京都稲城市から通う、会員の磯田香さん(34)は「農家さんは作物だけでなく環境や景色もつくり上げていることがわかった。将来へと残していけるように少しでも貢献したい」と力を込める。会員で神奈川県川崎市の実業家(42)は「農業で活力と元気が出る。収穫が楽しみ」とほほ笑む。
 参加者が支払う料金は、初年度は入会金が3千円、研修費が2万円、2年目からは年会費が1万円だ。収穫物の販売は一切せず、自家消費する。早苗鑑や収穫祭など、会員が顔を合わせるイベントを開いて、交流と親睦を図っている。

就農した会員も

NPOは市民の有志7人が集まり10年前に設立。草刈りなどあぜ管理の徹底や水利組合の水路清掃への参加、中元や歳暮などの節目にあいさつへ出向くなど、地元農家との信頼関係を築いてきた。栽培技術などは近隣の農家に教えてもらうほか、農業技術者や篤農家を招いた講演会を企画している。

活動をきっかけに農家として独立し、就農した会員もいるという。仲野さんは「体を動かしたり自然とふれ合う人が少ない中、楽しみながら活動を広げていきたい」と話している。



NPO法人「畑と田んぼ環境」再生会 神奈川県相模原市

その日の作業内容などを確認する会員ら



休憩を挟みながら自分のペースで作業を進める